

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

夏秋トマトの灰色かび病の発生状況と防除対策（技術情報第8号）について（送付）

夏秋トマトの灰色かび病の発生状況および防除について下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考として御活用ください。

記

現在、県内の夏秋トマト栽培地域で灰色かび病の発生が平年よりやや多く見られます。今後9月の秋雨時期にかけて発生が拡大する恐れがあるため、伝染源となる被害果や被害茎葉等を速やかに除去するとともに、薬剤散布による予防を徹底しましょう。

1 発生状況

- 1) 8月第4半旬に実施した調査では、茎葉での発病株率が37.6%（平年27.8%）、発病度9.4（平年7.6）で平年比やや多であった（図1、2）。
また、果実での発病株率は0.4%（平年0.3%）、発病度0.1（平年0.1）で平年並であった（図3、4）。
- 2) 病害虫防除員からの聞き取りによると、8月の発生は平年比やや多～並である。
- 3) 9月の中山間地域の平均気温は20℃前後であり、今後本病の発病に好適な温度となることが予想される。また、本病は9月の秋雨時期に多発する傾向があるため既に発生が確認されているほ場では、今後の気象条件により発病が拡大する可能性がある。

2 防除対策

本病は糸状菌による病害で、トマトの果実、花卉、茎葉などに発生する。本菌が摘心部位や葉かき跡の傷痕から感染し、茎に発病（写真1）すると、その上部はしおれ、枯死するため、多発すると著しい減収となる。また、果実に発生するとゴーストスポット^注（写真2）を生じ、品質を著しく低下させる。

本病は20℃前後の低温と高湿度条件で発生しやすく、感染した部分が腐敗し、やがて表面に灰色のかびと胞子が密生する。胞子は周囲に飛散し、次々と伝染し、ほ場内で発生が広がっていくため、以下の対策を行う。

注) 灰色かび病の胞子が果実表面に付着し生じる黄白色円形の中心点がある小斑点。

- 1) 本病は気温が20℃前後で湿度が高い場合に発病が多くなるので、発病を抑えるために摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
- 2) 発病後は薬剤散布での防除は難しいので予防散布に重点を置く。
- 3) 被害果、被害茎葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、ほ場外で適正に処分する。
また、薬害や生理障害により枯死した葉も本病の伝染源となる恐れがあるため適正に処分する。
- 4) 薬剤耐性菌の発生の恐れがあるため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

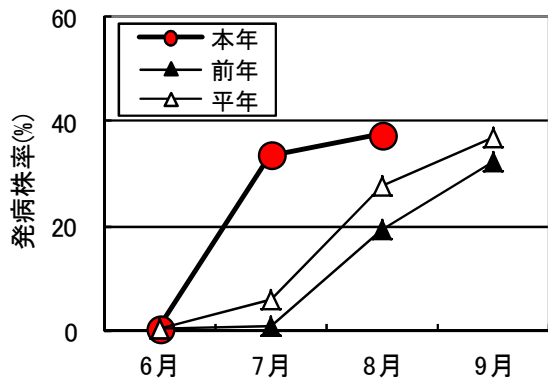


図1 灰色かび病発病株率(茎葉)の推移

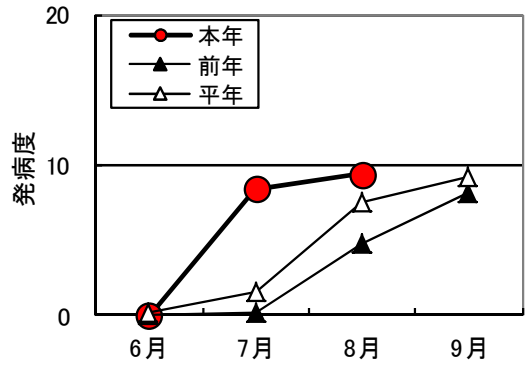


図2 灰色かび病発病度(茎葉)の推移

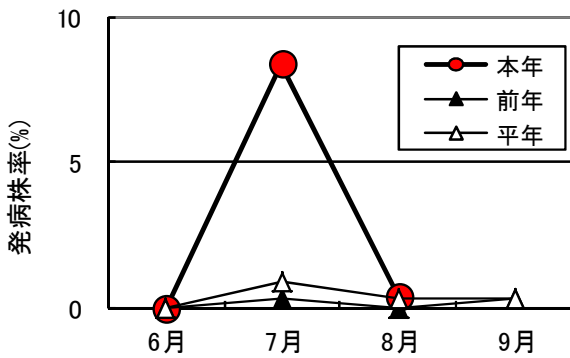


図3 灰色かび病発病株率(果実)の推移

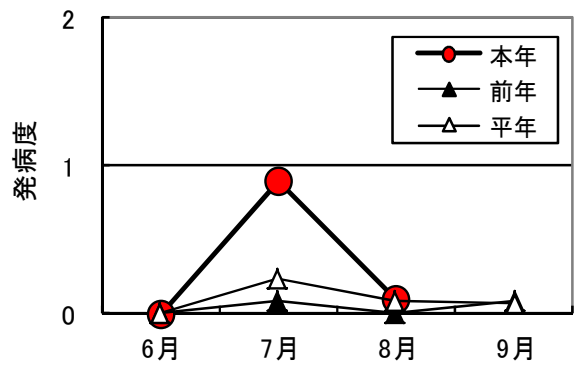


図4 灰色かび病発病度(果実)の推移



写真1 茎に発生した灰色かび病

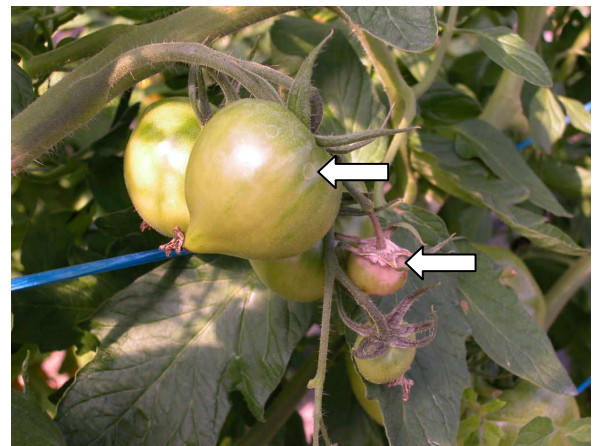
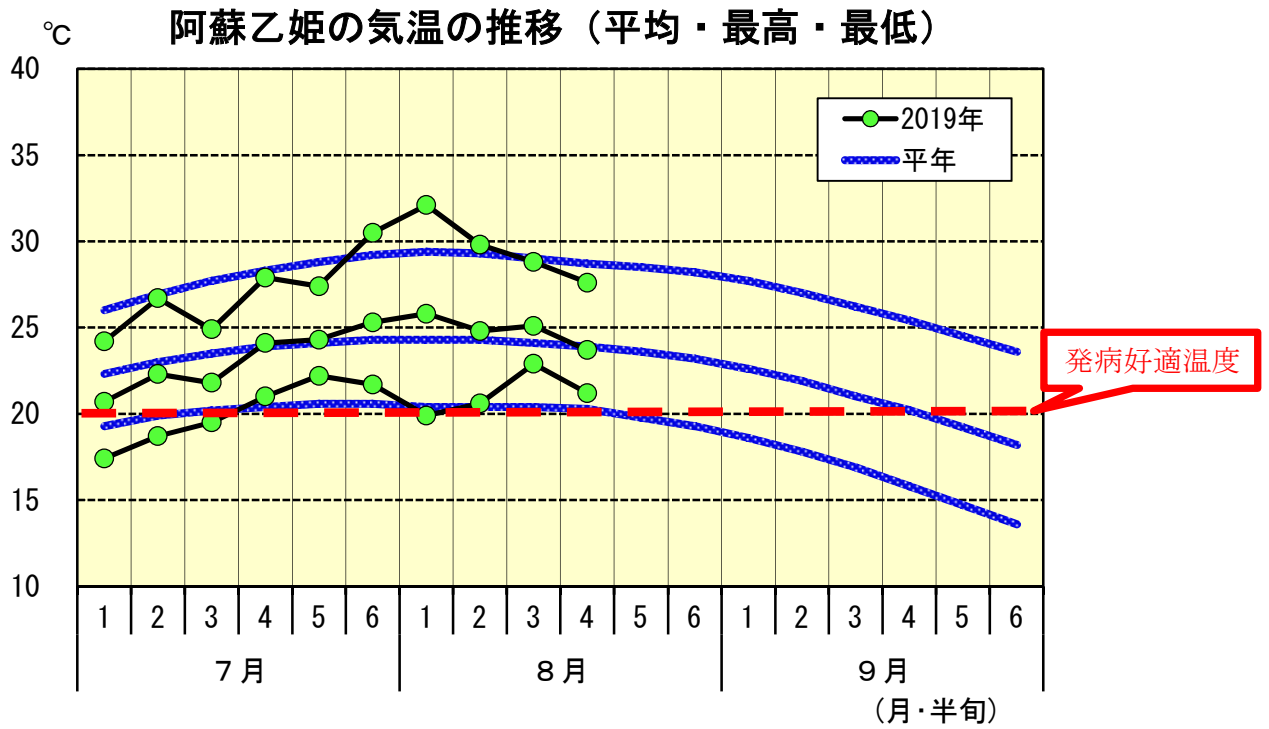


写真2 果実に発生した灰色かび病

上部矢印：ゴーストスポット
下部矢印：発病による果実の軟化腐敗

(参考)



※気象庁のデータを参照。

※平年値は、1981年～2010年の30年間の観測値の平均をもとに算出している。